

浪江の こころ通信

● 第89号 ●



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のこころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信(※1)」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※2)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のこころ通信」を編集・発行しています。

※1 浪江のこころ通信は、町民の皆さんがお話した「こころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聞き取ってまとめた原稿をほぼ原文のまま掲載しています。

※2 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ

再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から7年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第89号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592

双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2

「浪江のこころ通信」宛

FAX.0240(34)4593





荒川 勝己さん(請戸)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：9月7日

切り花作りはまだまだ勉強です。 それでも、農業は楽しい

震災前は請戸に暮らし、津波と原発事故により秋田に避難されていた荒川さんにお話を伺ったのは、第6号(平成23年12月号)の時です。それから7年近くが過ぎ、浪江に戻られた現在は、花卉専業農家として加倉地区で再起を図っていらっしゃいます。



◆私の浪江の暮らしに、花卉研究会の仲間たちは大切な存在です
今は下加倉に自宅を移しましたが、以前は請戸で米とシクラメンなどの鉢物を作っていました。災害発生当時、私は母や家族のことは父に任せて消防団の活動をしていました。丸2日後の3月13日まで家族とは会えなかったんです。両親は埼玉に住む私の姉の所へ、私たち夫婦と娘は、妻の実家がある秋田へ避難しました。震災当時、児童館の年長さんだった娘は今、中学2年生になりました。妻と共に秋田に居ますが、原発事故のリスクを最小限に減らしたいし、娘の繋がりを大事にしてやりたいと思っています。花卉栽培で農業を再開しようとして、平成29年4月からほぼ毎月、準備のために秋田と浪江を往復しました。農家の長男坊です。だからね、墓守もしなくちゃいけないし、戻るのは決めていました。避難指示解除後は、ここで父とトルコギキョウやストックなどを作っています。請戸で作っていた鉢物は花が咲いてからでしたが、切り花はつぼみから開花までのタイミングを計りながら出荷しなければならず、試行錯誤を繰り返しています。その上、今年はまだ待たなしの酷暑だったでしょう、

大変でした。そんな切り花づくりの「初心者マーク」です。から、*浪江町花卉研究会に入っています。仲間と共に品質向上を図っています。なかなか先輩方のようにはいかないんですよ。うちのトルコギキョウは2月に定植して初夏に出荷するものや、5月から定植しお盆の時期に向けて出荷するもの、時期をずらして10月出しの商品テストを行うもの、そして12月にはストックの出荷など、年間を通して忙しくしています。今は、今年の秋に結婚式を予定している友達と式に使う花を丹精を込めて育てているところです。

◆家ができたことで、人が立ち寄ってくれるようになりました
6月から7月、ビニールハウスが「真っ赤」になります。トルコギキョウの開花抑制のために赤色灯をつけるためですが、結構目立ちます。だいたい父の友人・知人ではあります。が、ちよこちよこ立ち寄ってくるようにになりました。今の浪江町内には、戻ってきた人より避難先から通ってきた人が多いように感じます。戻ってきた方も年配の方が多く、活気もありあります。ね。近隣の富岡町や楡葉町のようないなショッピングタウンがない



▲ビニールハウスにて。このハウスが時期によって赤く光るそうです。(福浪線沿い)

*農業者組織「花・夢・想みらい塾 浪江町花卉研究会」

原発事故の被災地である浪江町を花の一大産地にしようと平成29年8月19日に発足。いち早く浪江町に戻り、農業による復興を目指す会長の川村博さん(NPO法人Jin理事長)を中心に、花卉農家や新規就農者など14人が集い、活動を行っている。荒川さんによると、花卉農家仲間は準備中も含めて現在7軒。

浪江では、買物が大変です。ねじ1本買うのも30分かけて原町(南相馬市)まで行かなくてはなりません。日々の食品も買出しが必要。ですから、小さくてもいいから品ぞろえがある程度充実しているスーパーが欲しいと思っています。



原 茂さん(酒田)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：8月7日

多少の不便は覚悟の上。 何と言っても、浪江の我が家が一番

茂さんと幸子さんご夫妻は、現在お二人暮らし。手入れの行き届いた自宅や庭木は、避難生活の最中も欠かさず丹精を込めた賜物なのでしょう。お気に入りの庭を見渡せる特等席に座る茂さんに、この7年の来し方をお聞きました。



▲幼馴染同士で結婚し、いつも一緒に過ごす仲睦まじいご夫妻です。

◆特例宿泊から準備宿泊を経て、間もなく丸2年
平成28年9月1日から26日まで特例宿泊が実施された時、うちは真っ先に戻ったよ。それまでも、妻と2人で毎日のように二本松市郭内の仮設住宅から家に通っていたんだ。月1、2回、天候が悪かったり、体調が優れない時以外は、朝5時に出勤して、葛尾の検問所が6時に開くの待って浪江に入った。最初の頃は外で弁当を買ったりしたけれど、そのうち飽きちゃって弁当を作ったよ。特例宿泊が決まったらすぐ

◆8か所くらい避難したかな
あの震災・原発事故の時、巡回していたパトカーに避難を告げられて、家族で南相馬市原町の馬事公苑に行ったんだ。そこで一緒になった人から聞いて、原町の道の駅や原町第一小学校などに移ったんだよ。一緒に避難した孫は、道の駅で頂いた「モヤシの味噌汁」が大のお気に入りになったんだ。

南相馬市が大型バスで新潟へ避難するという話を聞いて、うちは息子たちが避難している千葉県成田市に行くことにした。成田市は孫たちの学校と住居をセットで探してくれたり、本当に素早い対応してくれたんだ。20日間くらい滞在したけど、

れど、浪江町の情報が全く入らないこと、こんなに世話になっていいのかわからない。あつて、福島県に戻って二本松市東和の下太田小学校に4日間、野地温泉(福島市)に約2か月避難した後、郭内応急仮設住宅に入ったんだ。仮設住宅の暮らしは相当なストレスがたまることがつくづく分かったよ。

◆週2、3回、原町へ買い出し。でも分かってきたことだらね
昨年の秋、箸や筆記用具が急に持ちづらくなって、当初は脳梗塞を疑われたけれど、急性筋痛症だったんだ。でも、入院して2、3日で歩けるようになったし、相変わらず午後6時過ぎには寝て、午前3時には起きる生活を元気に続けているよ。今は、闘病中の次男の様子が一番の気掛かりだね。

残念なのは、仮設の頃の隣近所も含めて70歳代前後の知り合いがだいぶ亡くなったことだね。それでも、浪江の自宅には息子や孫たち、親戚なんかがいよいよ訪ねてくれるし、確かに買物はちよつと遠いけれど、楽しく暮らしているよ。



いわき浪江押花会

松田サツ子さん(権現堂)・細田 和恵さん(棚 塩)
志賀智恵子さん(樋 渡)・伊東 勝子さん(権現堂)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：8月24日

心を寄せ合い支え合いながら、花を楽しむ



メンバーの
皆さんから一言
(五十音順)

●池田チヨ子さん(谷津田)
いわき市で8年目になりました。浪江で押し花をやっていた友人がいたので、その頃はまだ習えませんでした。会ができた時からの会員ですが、何年経っても1年生。でも、みんなと楽しく話したり、山に材料を探しに行ったりしています。



左から(上段)松田先生、細田さん (下段)志賀さん、伊東さん

「いわき浪江押花会(以下、会)」の主な活動は、いわき市の「なみえ交流館(以下、交流館)」での月に一度の教室です。伺った午前中も、メンバーの方々が楽しそうに制作をされていました。熱心に指導をされているのは、なんと92歳になる松田先生(雅号 静華)と、そのお弟子さんの細田さん(雅号 静恵)。会のお世話役をされている志賀さん、伊東さんにも加わっていただき、日頃の暮らしや会の活動についてお話をいただきました。加えて、当日教室に来られていた7人のメンバーからもコメントを聞かせていただきました。

●伊東さん 震災前は、救護施設「福島県浪江ひまわり荘」に看護師として勤務していました。震災後、「ぐるりんこ隊」の一員として松田先生に出会い、この交流館のサロン活動第一号として講師になってくださいとお願いしたところ、すぐに承諾してくださったんですよ。それに、交流の場って大事ですよね。押し花教室がきっかけとなり、次々といろんな教室が立ち上がりました。隣近所とうまく付き合えなかった人も多かったんでしょね。浪江にはいい思い出がたくさんあります。避難している時

●松田先生 以前は浪江の町中、新町で豆腐屋「のんきや」を営んでいました。お店を閉めた後、*1「ふしぎな花俱樂部」の第一期生として、押し花を習い始めました。夫が油絵を描いていた影響もあるのでしょうか、もう30余年になります。平成21年には、静岡県で開催された「世界押し花絵芸術祭2009 in 浜松」で浜松市商工会議所賞を受賞しました。震災後はいわきから東京、そして再びいわき市に戻ってきました。声掛け訪問活動を行う*2「ぐるりんこ隊」の伊東さん、志賀さんが自宅を訪問してくださって、この会が生まれました。お声掛けいただいた時はうれしかったですね。発足当時は30人くらいでしたが、今は私たちを含めて13人ですが、みんな腕を上げて一人で額が作れるようになっていきます。会があるから長生きしているようなものですよ。私はできれば浪江に帰りたいですね。四つの教室(静華の会)も、作品も額も、全て置いてきました。押し花は、自然にあるものならば何でも押す材料になりますから、採集や野外教室が行える、元どおりの浪江を返してと言いたいですよ。

●志賀さん 仙台市から二本松市を経て、平成24年6月からいわき市に住んでいます。浪江に居た頃から、松田先生や押し花のおうわさは聞いていましたし、十日市の時にお店での展示も見ていたんですよ。浪江町の今後は気掛かりです。そうは言っても、いわきの住民にもなりきれず、長くお世話になってるだけに心苦しくもあります。でも今は会のお世話が楽しいですし、作品も額まで作ると達成感があります。松田先生の元氣も大きな励みです。日頃、会の事務や会計、毎月の教室の日程調整、研修会のお世話などをしています。毎年、研修旅行として「ふしぎな花俱樂部」の作品展に出掛けています。全国大会(日光市)や八王子市、そして今年は東北インストラクター展(仙台市)です。

●伊藤ハル子さん(樋渡) 震災直後からいわき市にぐるりんこ隊の一員で、松田先生の地域を回っていました。松田先生に講師になっていただき、私も入会しました。日々、草花を見ると作品作りのことを考えてしまいます。

●岩倉 和子さん(川添) 白河に避難していましたが、3年前からいわき市に住んでいます。交流館を訪れた時に案内を見て入会。生きた花とは違う、押した花の美しさにいつも感動しています。

●葉 静江さん(北幾世橋) 郡山から本宮へと避難し、5年前にいわき市へ。以前から松田先生の教室は知っていましたが、会のお世話をされている志賀先生に誘われ、知り合いもいたので入りました。花が好きで、押し花を見た途端「うわあっ」という感じで、今は材料探しに夢中です。

●佐藤ユウ子さん(北幾世橋) いわき市に住んで3年目です。80歳を超した夫は病気がちなのですが、毎日を明るく、楽しく過ごしたいと思っていました。叶さんに誘われて入会しました。花が大好きなので、うれしい趣味です。

●中野 友子さん(立野) 避難した矢吹町では家族離れ離れで4年暮らした後、いわき市に。近所付き合いもなく、半年以上家にこもってしまい、交流館を訪ねました。会の期の途中でしたがすぐに入会させていただき、今では外に出るきっかけもできて、気持ちも楽になりました。

●茂木 文子さん(樋渡) 震災の年の7月にはいわき市に。市内を転々とし、隣近所との付き合いもなかったのですが、平成27年に入会。材料探しも楽しいですが、作品ができて家に飾る楽しみも大きいですね。

*1 ふしぎな花俱樂部 平成4年、杉野俊幸(向)杉野押し花研究所が、株式会社日本ヴォーグ社と提携し押し花の会「ふしぎな花俱樂部」が発足。以来、全国各地の自治体イベントや文化事業、百貨店の催事等に数多く参加し、全国の倶楽部グループリーダーが地域に根ざした押し花普及活動に取り組んでいます。

*2 ぐるりんこ隊 いわき市内で避難生活を送る浪江町民同士のつながりや心を支えるため、「なみえ絆いわき会」に所属する女性を中心に、平成24年4月に発足。エリア別に月1回、担当者が戸別訪問し、困りごとや健康相談などの活動を5年間行ってきました。平成29年3月に一旦解散。同年10月に浪江町から感謝状の贈呈を受けました。